

61 石塚三郎旧蔵・新潟県歯科医師会日誌

— 草創期の歯科界を探る

佐藤 泰彦

第二十七回日本歯科医史学会で、演者は祖父佐藤梅次郎の盟友石塚三郎先生の事跡と題して口演した。

今回は、新潟県歯科医師会設立総会に於て初代会長に推され就任した石塚三郎が、その日から四年八ヶ月間、自らの筆墨で克明に綴った貴重な第一次史料の「日誌」について述べる。

日誌は、石塚三郎が戦時中、北蒲原郡安田町の生家に疎開させた遺品の中にあつたものである。

明治末から大正にかけて撮影した二千二百枚の写真がラス乾板などとともに、吉田東伍記念博物館建設にあたり、生家の当主石塚セツ氏（石塚三郎の甥故石塚征一氏夫人）が安田町へ一括奇贈されたものである。

また、日誌を補完する「会員名簿・会計簿」や、日誌

に符合する歯科医師会総会、歯科衛生展、歯科関係などを撮した写真乾板約百三十枚ある事もわかった。

日誌は、堅牢表紙（商品名）を使用した縦二十三・六糎、横十六・一糎の一冊で中央に『日誌』右側に『明治四十年九月以降』と毛筆で縦書きし、左下方に縦・横三・二糎正方形の朱印『新潟県歯科医師会印』が押印されている。

表紙を捲ると薄手の二つ折和紙青罫紙百六十八頁に石塚自身が会務の詳細を書き留め、関係する事項を報じた新聞の「切り抜き」が十六ヶ所貼布されている。

明治四十年（一九〇七）九月二十四日開催の第一回総会から書き起こされ、明治四十五年（一九一）五月二十一日まで続く。

即ち、第一回総会は、高田町長養館に於て午後四時から開催された。出席者は十四名、正確な会員数は記録がなく不明であるが史料により二十名と思われる。

無名記投票による選挙で、石塚三郎が会長に、竹内清平が副会長に当選し就任した。

石塚は歯科医会時代からの政治的手腕と面倒みのよさ

から、三十一歳の若さで会長に当選し、その後も引き続き十四年もの長期に亘り会長職を務めることになる。

また、役員選出は会長一任とし幹事二名、評議員五名が決まり、会則、薬価治療料金規定、非医取締の件等を審議した。議事終了後、来賓門石長秋氏の記念学術講演あり、宴終り散会したのは午後十一時であった、と記述している。

翌明治四十一年以降は、いわゆる「非医問題」に関する事件が急増した次第を記録した部分が重要である。

明治三十九年(一九〇六)制定の歯科医師法施行により生じた、それ迄治療行為を行って生計を立てていた従来営業者と正規医との対立である。

そこでは、正規医からの告発、警察による取り締り、正規医の「誇大、中傷、捏造」の新聞広告、非医の逃亡などが描写されている。

また、正規医の中にも非医を利用して分院を任せていた者もいたため、非医擁護派も出現した。これが明治四十二年(一九〇九)十一月三日、石塚三郎会長の地元長岡市で開催された臨時總會における紛糾事件、いわゆる天

長節事件に発展し、一度は円満解決、落着の兆しがありながら再燃、長岡市医師会有志者の調停により事件発生後三ヶ月を要してようやく和解、終息した描写が圧巻である。

黎明期から草創期の落し子達は、司直の手にゆだねられ、或は仲裁人の世話になり、会員の協力によって着々と案件を消化して行った経過が記録により理解する事ができる。

石塚は、新潟県歯科医師会長として、中央への出張は勿論の事、県庁、警察署、裁判所、医師会、そして役員及び各会員宅へと東奔西走の毎日であり、總會や役員会での応酬が生々しく自筆で記録されている。